ふたりの画家、ふたりの絵 <4F>

ARTIZON MUSEUM

黒田清輝《針仕事》で描かれているのはマリア・ビヨーさん、岸田劉生《麗子像》で描かれているのは岸田麗子ちゃん。
マリアさんと麗子ちゃん、ふたりはどんな人だろう？

黒田清輝《針仕事》
1890年　油彩・カンヴァス

岸田劉生《麗子像》
1922年　テンペラ・カンヴァス

Q１．マリアさんは何をしているかな？

□ 本を読んでいる　□ 居眠りをしている　□縫い物をしている　□ 折り紙を折っている　□ 考えごとをしている
□ それとも別のことかな。何をしていると思う？　→マリアさんは、(　　)

Q2. 麗子ちゃんは何をしているかな？

□ 誰かと話している　□ 「にらめっこ」をしている　□ 「達磨さんが転んだ」をしている　□ モデルだからポーズをとって、じっとしている
□ それとも別のことかな。何をしていると思う？　→麗子ちゃんは、(　　)

Q3. 絵をかいた人にとって、ふたりはどんな人だろう？

□ お母さん　□ きょうだい　□ 娘　□ お友達　□ 恋人

あなたならどう描いて欲しい？どう描きたい？誰を描きたい？

黒田清輝と岸田劉生、日本の洋画（西洋由来の絵画、おもに油絵）を代表するふたりが描く女性像。しかし、描かれる人物も異なれば、表現方法も全く異なる。

画家とモデルの関係を考えながら、作品について考えてみよう。

黒田清輝、岸田劉生、ふたりの思い入れ

黒田清輝（1866-1924）は「日本洋画の父」と呼ばれる存在。本作は黒田清輝が青年時代、フランス留学中に描いた作品である。明治前期、急速に西洋化する一方、江戸の武家文化がいまだ色濃い時代において、ヨーロッパへの留学は並大抵なことではなかった。船で 40 日以上かけて渡らなければならないのである。留学当時黒田は 18 歳、日本にいる母親へ手紙を何度も書いて送り、見聞きしたことを誇らしげに伝えている。そんな青年黒田は留学中、パリ郊外にある小村を度々訪れていた。《針仕事》のモデルとなったのは、そこでの宿泊先の娘マリア・ビヨー。彼女は今、裁縫に夢中だ。田舎における庶民生活が、後に大家となる留学生の黒田にひとときの安らぎを与え、その記憶を留めた作品のようにも思われる。

岸田劉生（1891-1929）は細密な写実で有名な作家。病気がちで 38 年の短い生涯の劉生であったが、その画業の中で最も多く描いた人物が長女の麗子であった。劉生はこの愛娘が 5 歳の時から肖像を描きはじめ、劉生自身が亡くなる、麗子 16 歳の時まで描きつづけた。アーティゾン美術館所蔵の《麗子像》が描かれたのは麗子 7 歳の時である。作品制作中、麗子は動くことができないため、体がしびれていないか、劉生も娘に気をつかっていたようだ。画面上部には左右に一字ずつ、右から「麗子」と大きく赤色で書かれており、続けて左上から「壬戌（大正 11 年）三月二十八日劉生写」と日付が記されていることからも、娘の成長の記録を描き留めようとする父・劉生の姿勢が伝わってくる。

当時の画壇の流れ

黒田清輝、岸田劉生とも身近な女性を対象として描いているが、その人物に対する思い入れはそれぞれであった。また、表現方法にも明確な違いがある。黒田の《針仕事》では、裁縫をしている女性の後ろから、強く明るい光が差し込んでいる。このような明るい色彩を特徴とした外光描写は、黒田によって日本に持ち帰られ、明治後期には日本の洋画壇における主流表現となった。一方、大正時代（1912-1926）に岸田劉生は、人間の内面を描写しようと徹底的な写実を追究する。画壇は劉生の影響を受け、日本画では速水御舟（はやみぎょしゅう）（1894-1935）を筆頭に「大正の写実主義」と呼ばれ、物事を自分の見えたように描くことが流行する時代となる。劉生はそのはじまりとされる存在であったのだ。

ご自宅から大きな画像を見たい方は、作品検索より作品タイトル（例えば「黒田清輝」「岸田劉生」）で検索！